

人は孵化し続ける生き物

一尾 祥永

京都芸術高等学校

「世界」とは何なのか。200ヶ国近くある国か、それとも地球全体か、はたまたもっと大きな宇宙なのか。どれも紛れもなく「世界」だろう。おそらく、ほとんどの人がとてもスケールの大きい何かだとも思えない。けれど私はもっと小さく身近な“何か”だと思っている。その何かとは、“人”だと思っている。人それぞれ価値観や思考は異なっている。同じ思考を持つ人間は存在しない。では、どうして人は異なるのか。それは、見ている「世界」が違うからだと思っている。例えば、右目を閉じた時に見た景色と左目を閉じた時に見た景色とではほんの少しではあるが違って見える。右目と左目との幅はせいぜい数センチだ。されど数センチだ。その数センチでも見る景色が変わって見えるのなら人と人では見ている景色が大きく変わることが今ので分かったはずだ。ならば、「世界」とは人だと思ふのはなぜか。

かつて、作家ヘルマン・ヘッセは言った。鳥にとって卵は世界で、生まれるためにはその一つの世界を破壊しなければならない、と。

私が小学生のころ、学校の規則によって子供だけで校区外に遊びに行くことを禁止されていた。しかし、規則を破り校区外に遊びに行く者も少なからずいた。卵の中が校区内とするのなら、小学生にとって校区内とは「世界」だということだ。その世界から生まれ出るためには規則という殻を破る必要がある。殻を破り校区外に行けた者はそうでない者と見る「世界」がこの時点で変わったのだ。こうやって、人は見る「世界」が次第に変わっていきそれぞれ違う価値観や思考になっていくのだと思っている。

中学生になれば、行動を制限するような規則は消え、新たな仲間や心の成長、学校行事を含めいろんな場所に行く機会が増えてくるようになる。様々な景色を見たり経験をして自分の中に「世界」を作る。何かに没頭することを自分の世界に入るといのように皆「世界」を持っている。子供によくみられる傾向だが大人のそれとはまた別のものだと思っている。子供における没頭状態とは卵の中のこと。小さい世界に閉じこもって外部の情報を遮断している状態だ。自分の世界ではない。大人になるにつれ自分の「世界」を確立させていく。中学校卒業時が一度目の確立とするのならこれ以降かわっていく人は皆、確立させた「世界」を持っていることになる。全く別の土地で生まれ育ったということはつまり、全く違う「世界」を持つ者で世の中溢れている。

このように、人の中に「世界」が存在している。人と関わるということは「世界」と関わること。人の中の「世界」を知れば自分の中の「世界」も変化していき、価値観、思考が変わっていくのだ。

人と関わることで人は変わる。夢が変わる。目標が変わる。どれも自分の中にある「世界」と他人の「世界」が統合されたことによって起こったこと。周りの人間が善人なら自ずと自分も善人になるのは周りの人間が善の「世界」を持っているからだ。逆も然りで悪人にもなりうる。

人の中にはそれぞれ「世界」があり、「世界」というものは日々変化していくものだ。

参考文献

「デミアン」ヘルマン・ヘッセ／著 高橋健二／訳 新潮文庫